

災害と社会、地球環境に関する広域的研究論文報告集 刊行にあたって

この報告集は「災害と社会」研究談話会と「人新世生存」研究会の発表をもとにまとめたものである。「災害と社会」研究談話会は、2017年度開始の日本建築学会特別研究委員会として「人為的要因による自然災害防止のための社会・技術の在り方」をテーマに研究に着手し、2020年度から2年間の第二次研究委員会を経て、2022年度から任意の私的研究会として研究討論を継続してきた。

2017年以來継続している本談話会の理念は、災害やその対策について細分化された専門分野別の知識として扱うのではなく、社会の次元を含めて広く実践的にも理念（哲学）的にも検討することであり、災害被害防止に向けて、いわば社会の在り方論を構築することである。この考えをもとに理学、工学だけでなく幅広い種々の学問体系と結んで論及することに行っている。それだけに、文理融合や人文系・社会系との連携といった次元を超えて、個別の専門分野間の壁を乗り越えて、各体系との複合や融合ありきとして最初から対象を広げて考えることで旧来の学術分野にとらわれない自由な討論を行ってきた。

研究成果は2019年3月と2022年3月に建築学会の特別研究報告書60,63として刊行されたが、任意団体になって4年、ここにVol.3として研究報告集をまとめることになった。コロナ禍を機に自宅からリモート参加で居住地を超えて討論できるようになり、北海道から九州まで様々な地域の多分野研究者が一市民として自由に討論できるようになったが、本報告は、そのようなリモート討論が可能になった後の最初のまとめであり、そのおかげで充実した討論ができ、その成果を反映させることができたと自負している。

「人新世生存」研究会は、この研究談話会を母体として2023年3月から開始され並行して開催されてきた。きっかけは星野克美著『人新世の絶滅学』が2022年11月に刊行され、同月開催された地球史システム・倫理学会大会において星野克美と同室発表した西原智昭と外岡が発起人となって著者が語る『人新世の絶滅学』研究会を立ち上げたことであった。第18回地球システム・倫理学会大会（2022.11.05、慶応大学三田）は主題「人類はどこへ向かうのか？真のwell-beingを求めて」として開かれ、午前中に行われた星野、西原、外岡の発表3題はともに地球環境の極めて深刻な状況を浮き彫りにするもので、議論がかみ合い、司会者の山脇直司（同学会副会長・当時）はさながら企画されたシンポジウムのようなものであったと評した。また、午後のシンポジウムが「well-beingを求めて」楽観的な話題であったことと、午前中の三者の発表の地球環境問題の深刻さの落差が際立っていたことも同年報に大会報告として書いていた。学会の一般発表の席上では異例のことながら、星野が82才（学会当時）と高齢であることから、自分は学会発表から引退したいが、若い世代に地球環境の危機を伝えたいので研究を引き継いでくれないかと西原、外岡に強い依頼があり、地球環境問題の深刻さ、その重要性に鑑みこの研究会を立ち上げることになった。

両研究会とも実質世話人は富樫豊で、この報告の取りまとめも富樫が担当した。今回、一般財団法人日本開発構想研究所の御好意により同所UEDレポート特別号として、この報告集を刊行いただけることになった。代表理事阿部和彦氏には、研究会での討論にも御参加いただき、この報告の刊行の労を代表自ら御引受けいただき、この会の活動を印刷物としてまとめ、配布いただくことで、我々のささやかな成果を世に問う機会を具現化していただいた。深く感謝の意を表するものである。

「災害と社会」研究談話会 世話人 富樫 豊 富山県在住
「人新世生存」研究会 世話人 外岡 豊 藤沢市在住

2026（令和8）年1月15日